

2020年12月27日（日）「狭い門をくぐり、細い道を行け」

マタイ 7:13-14

13「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。14 命に通じる門は狭く、その道も細い。そして、それを見いだす者は少ない。」

【序論】

2020年最後の礼拝となりました。これまで、年末と年度末の説教はデイビッド・ワングの『最後まで走り抜け』という本から語らせていただきました。この取り組みは、私自身が牧会の働きを最後まで全うできるよう、いつも心を引き締めて節目の時を過ごそうという思いから始めたものですが、同時に教会の皆様にも同じ思いで聖き締めくくりにしていただければと願っております。前回でこの本の全章から語り終え、今後はどうしていこうかと思案していたところ、同じ著者による『狭い道』という本を書棚に置いていることを思い出しました。そこで、今後はこの本の内容を読み解いてお伝えしていきたいと思います。

【本論】

本論 1. 狭い門を探せ

この本のタイトルを聞いてすぐに思い浮かぶのは、マタイ 7:13-14 の聖句でしょう。今日の中心聖句とさせていただきましたが、箇所としては主イエスの山上の説教の一部です。この箇所では、「狭い門」から入り、その先に続いている「細い道」を歩けということが教えられています。

「広い門は広い道に向かって開いており、破滅に至る」「狭い門は狭い道に向かって開いており、その道はいのちに至ります。一方の道には大勢がおり、もう一方には少数がいます。私たちがイエスを主と呼ぶとき、私たちは群衆を離れ、狭い道に沿ってイエスに従うのです。」(p. 18)

「狭い」(τεθλιμμένη) とは、困難や苦労を意味する「θλιβω」に由来する言葉です。その門はまず、小さいので見つけること自体が困難であると言われます。それは真理の道へと続く門であり、真理とは世に溢れる情報の中からどうにか見つけ出さなければな

らないからです。とりわけ日本人全般は、大衆が「良い」と考える流れに沿って生きていなければ不安な国民です。しかし、その流れの中に「狭い門」はありません。

「正しく考えることは、偽りの情報もまじりあうかごの中から真理をつかみ出すようなものです。神は金やダイヤモンドのように尊いものを地の奥深い所に置かれており、それらを取り出すことは容易なことではありません。発破をかけ、掘削をし、製錬をし、そして精錬をして成分を取り出すまでには、長く退屈な過程があります。同様に、すべてにまさる尊い真理に至るには、近道のない、長く狭いルートをたどらなければなりません。」(p. 18-19)

この「狭い門」とは「救いの門」または「永遠のいのち」と言い換えることができるでしょう。多くの人がこの門を探し求め、まことの幸せ、まことの平安を見出そうとしています。しかし、この世には多種多様な宗教・哲学があり、どれが正しいのかが分かりません。経済的に豊かになることや自己実現こそがそれだと考える人もいます。そのような多様化した価値観の中で、「イエス・キリストの十字架による罪の赦し」を見つけ出さなくてはならないのです。しかし、それを見つけられる人は稀です。

「私たちの悟りは、神が啓示された聖書から、神の言葉を知るように神が与えてくださった思いを通してやって来ます。あらゆる情報源から引用することは自由ですが、それらは御言葉によってろ過され、試されなければなりません。」(p. 17)

「私たちが聞いたり読んだりすることのすべてが真実とは限りません。ただ神が啓示された御言葉の全体によって神が是認しておられることだけが真実なのです。」(p. 17)

本論 2. 狭い門をくぐれ

仮に「狭い門」を見つけることができたとしても、くぐること自体が困難であると言われます。この門の入り口には「自分自身を捨てて入れ」という但し書きがあります。ロイドジョন্ズの言葉も引用しましょう。捨てなければならないものとは、「この世のもの」「群衆」「この世を喜ばせるもの」「新生していない性質に属するもの」「それを喜ばせるもの」「腐敗したこと」「本能的なこと」「この世的なこと」「私たちの墮落した性質がかつて好み、行なってきた数々のこと」と言われます。これらはすべて、私たちが生まれつき持っている、「神の法」に相対する性質に属するものです。それらを両手に抱えたままでは、門が小さすぎて通ることができません。まず一度、明確な方向転換をしなくてはならない。「私は神に属する者になりました」「私は古き自分に属することをやめました」と。それは決然とした態度で告白されるべきです。

反対に、「広い門」についても理解しておかなくてはなりません。「広い」(πλατεία)とは、繁栄を意味する言葉に由来します。それは、生まれながらの自分(古き自己)が求めるままに生きることであり、この世的な繁栄、欲望に従う道です。その門は大きいので、人は簡単に見つけることができ、容易にくぐることができます。群衆が手をつないで、ぞろぞろとその門をくぐって行く。しかし、主イエスはその門を選択してはならないと言われます。なぜなら、それは「滅びに至る門」だからです。門が広ければ、それに続く道も広く、歩くのに困難はありません。皆と同じようにしていればよい。しかし、そこには死臭が漂っているのです。

『流れにまかせる』ことは、いい考えのように見えます。下流に向かって浮いていることができるのに、なぜ上流に向かって泳ぐのでしょうか。」

「数年前に、アラスカクルーズで、鮭の孵化場から遠くない町に立ち寄りました。川のそばの通りを歩いていると、ものすごい悪臭が鼻を突きました。本能的に見上げると、恐ろしいことに、何百匹もの鮭が下流へと流れていくのを見ました。魚の生涯の終焉の光景でした。—それらは上流に上り、たまごを産み、それから死にます。それは、『死んだ魚だけが流れにまかせる』ことを私が学んだときでした。」

「群衆とともに行くことは、やさしいことです。—より広いスペースがあり、多くの人々がいます。大通りは、祭りの雰囲気があふれています。私たちはいい気持ちで安心感を持って歩きます。私たちは正しい方向に動かなければなりません。実に多くの人々がいるのですから、間違っているはずがないのです。しかし、もし間違っているとしたら、どうでしょうか。」(p. 16)

「死んだ魚だけが流れにまかせる」という表現にはゾッとさせられます。言い換えるならば、「神に結びついていない人間はこと世と調子を合わせる」となるでしょう。「狭い門」をくぐった者も、いつしか「広い門」をくぐった者と歩調を合わせていることがあるのです。「群衆を共にキリスト者の生き方に連れて行くことはできない」「キリスト者になると、それと共に必ず例外的で異例な存在となる」「大多数の人が一つの方向に向かっていくときに、彼一人だけが他の方向に行かなければならない」(ロイドジョンズ)。

本論3. 細い道を歩き続けよ

「狭い門」をくぐった者は、「細い道」を歩き続けなければなりません。狭い門をくぐる人、細い道を歩く人とは、救われている人だけです。私たちは脇目も振らずにこの道を突き進まなくてはなりません。「右にも左にもそれではならない」と言われます(ヨ

シユア 1:7)。この生き方をしようと決断し、自分自身に投入し、それを選び続けるのです。神が喜ばれる生き方に飢え渴き、それを行ないたいと切望する。そのように生きているなら、私たちは間違いなく「細い道」の上にいるでしょう。

しかし、この一年を振り返るとき、私たちは何度も道を踏みはずしそうになったのではないのでしょうか。分かっているながら罪を犯し、古き自分の生き方に戻り、神との交わりを自ら見えなくさせることがあったのではないか。そのような状態に陥ったとき、私たちは後ろめたさによって神の御顔を仰ぎ見ることができなくなるのです。では、そうなってしまったら、私たちはもはや「細い道」の上にはいないのでしょうか。いいえ、まさに左右いずれかの崖っぷちにしながら、辛うじて転落しないような状態かもしれません。あるいは、側道に生えている木の細い枝にどうにか引っかかっているような状態かもしれない。いずれにしても、一度「狭い門」をくぐり、神と共に生涯歩むと決断した者は、幾度となく危険なところを通りながらも、神の守りによって「細い道」から転落し尽くしてしまうことはないのです。必ず神の許へと戻っていくことができる。罪を犯したとき、私たちはもう一度自分の状態を見つめ直し、細い道の真ん中に立ち直さなくてはなりません。具体的に何をすればよいか。罪を告白し、主イエスの血潮によって赦され、聖められることです。そのとき、私たちは言い訳したり、逃げたり、諦めたりしてはなりません。自分の罪を率直に認め、ただただへりくだって自分がしてしまったことを神の御前に明らかにするのです。そのとき初めて神との交わりは回復されるでしょう。神は私たちの闇を光に変えてくださいます。

最後に、「細い道」を歩くときに生じやすい誤解にふれておきたいと思います。それは、真理を追求するあまりに狭い考え方になってしまうということです。

「ゆるがせにできないことに関しては純粹であるべきですが、どちらでもよいことには互いの違いを認め合うべきです。」 (p. 20)

これは、真理を知ったことによって人を裁く者とならないようにという警告と言ってもよいでしょう。真理は押し付けるものではなく、思いやりをもって呈示していくものです。私たちが愛をもって語るところに、人々が受け入れやすくなる心の土壌ができていきます。「細い道」とは原則的に普通の人には受け入れられない道であることを忘れてはなりません。しかし、それはキリスト者とそうでない人々を隔てる壁なのではなく、心からの愛をもって語るところに、受け入れることのできる真理となります。真理を愛で包んで呈示する。「狭い門」「細い道」は、隠されたところから発掘されるダイヤモンドのような輝きを湛えたものであることを示していくことができるのです。

愛をもって真理を語り、頭であるキリストへとあらゆる点で成長していくのです。

(エペソ 4:15)

【結論】

2020 年を締めくくるにあたって、この一年の自分の歩みを振り返ってみたいと思います。その足跡は、あちこちの脇道に逸れかかり、あらぬ所に残っているかもしれません。しかし、主が私たちの手を取り続けてくださったからこそ、今この礼拝に集うことができているのです。神と自分との関係が良好でないことがもし心に示されるのであれば、その原因を見つけ出し、悔い改めの祈りをささげたいと思います。私たちは既に「狭い門」をくぐったのであり、「細い道」を歩み始めている者たちです。その道は人生の終わりまで地道にひと足ひと足歩み続けなくてはなりません。一人ひとりの 2020 年を主が聖め祝してくださいますように。そして、神と共に新しい年を力強く歩み出したいと願います。

【祈り】

私たちに狭き救いの門を示してくださった天の父なる神様。この年も私たちの人生を導き支えてくださったことを感謝いたします。今年も新型コロナウイルス感染症への対応に追われた年でもありました。一人ひとりの信仰が試され、状況が変わっても主の許に残るか否かが問われた年とも言えます。道が見えなくなっている兄弟姉妹がおられましたら、その手を主が握り続け、御許に帰ることができるよう、その心に語りかけてください。誰もが弱さを抱えています。その信仰を守り通すのも、人間の力によっては決してできないことです。主の憐れみによって、一人ひとりを最終的な救いの門に至らせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
大衆の中から取り出し、真理の道へと導き給う、父なる神の愛、
救いの門をくぐった者の手を握り、終わりの日までその信仰を支え給いし、主イエス・キリストの恵み、
「神のもの」としての保証、我らの額の刻印となり給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

